

性別における「そのほか」から考える防災教育 —小学校や中学校、高等学校への調査を踏まえて—

麦倉 哲*, 鈴木 久米男**, 菊地 洋*

(令和4年2月1日受理)

Tetsu MUGIKURA, Kumeo SUZUKI, Hiroshi KIKUCHI

Disaster Prevention Education from the "Other" In Terms of Gender
-Based on surveys of elementary schools, junior high schools, and high schools-

はじめに

本論は「いわての防災教育・学校安全教育」を主題として、岩手県内の児童・生徒を対象に実施した調査結果から、性別「そのほか」と回答した生徒・児童に注目して分析したものである。この調査では、性別について、「1:男、2:女、3:そのほか」の3択で質問している。調査結果からは、性の帰属に関する質問への回答は、男か女かに2分されるものではなく、多様であることを示している。性別「そのほか」と「男」「女」とを比べると、「そのほか」は、災害に関する関心・意欲は他と変わらないものの、訓練や家族等の他者とのコミュニケーションにおいては消極的となる傾向がみられた。本調査で得られた結果を考慮に入れて、防災教育や災害対応の改善を図る必要があると思われる。

1. 本論のテーマ

防災教育とは、命を守り、安全を確保するための教育である。学校現場を中心にしてこのことを考えると、防災に関する①科学的な知識を習得し、②地域社会のことを知り、地域社会と連携し、③そのうえで、学校が実践的なマニュアルや計画を

策定し、研修、各種のフィールドワーク、訓練を実施することである。防災教育については、現状やその効果について、再検討する機会をもつことも不可欠である。本論は、児童・生徒の性的多様性に着目して、生徒・児童の多様性を尊重したうえで、何をどのように改善したらよいかの検討の端緒につこうというものである。

2. 日本の現状および先行する研究・調査結果から

浅野幸子・池田恵子は、ジェンダーの視点から防災体制を検討し、課題を指摘している(池田・浅野2016、2019、浅野2020、2021)。内閣府は、男女共同参画の視点で、避難所運営の改善指針を示している(2020)。山下梓は、性的マイノリティの当事者が経験する、避難所での困難を指摘している(2019)。麦倉哲らは、避難行動調査の結果、避難行動をためらう要因として、避難所における環境要因の予期を挙げている(2020)。また、麦倉哲は、避難所において、女性や子連れ避難者が、避難所での滞在を比較的早期に切り上げる傾向を分析している(2021)。

かくして、性的マイノリティを自認する生徒は、

* 岩手大学教育学部, ** 岩手大学大学院教育学研究科

防災活動や避難所生活において困難を感じているのではないかという点が本論の主題である。この点の解明や改善提案が求められている。

性的マイノリティの人々は、日常生活の多様な場面において、困難な経験を積み重ねているのではないだろうか。このことは、マイノリティの立場におかれた人々の経験を想像するだけでも、多くの人々や、とりわけ為政者は気が付かずである。21世紀に入った日本においても課題は山積し、ほぼ未解決のまま推移していると思われる。

本論との関連で、日本の現状を振り返ってみよう。まず、性的マイノリティの子が、施設入所を拒否されるという事態が起きている。一般社団法人「レインボーフォスターケア」（さいたま市）が2017年に実施した調査では、全国の220か所の児童養護施設で、LGBTとみられる子を受け入れた経験がある施設は半数以下の99施設（45%）であることがわかった（注1）。生活が困窮するという場面においても、受け入れ先がない、もしくは限られている現状があり、入所を断られたり、性的アイデンティティを隠すことを余儀なくされたりしている現状がある。

性的マイノリティの人々が生活するうえでの困難は、ふだんの日常生活にとどまらないであろう。大災害の発災時や、それに続く避難生活においても、ふだんとは様相を異にする困難に直面していたのである。このことは、山下（2019）も指摘している。

災害発災時には、平素よりも困難な状況が発生していたようだ。大災害の緊急段階（救急救命の段階および避難の段階）においては、緊急事態であることと関係して、かなり画一的な様式に準拠しなければならなかったり、限られた空間や資源を共有したり分配しなければならぬ。そこではしばしば、多様性への配慮がなされなかったり、不十分にしかなされないという事態が起こっていたようだ。緊急事態ゆえの効率化は、相対的にマジョリティのルールに合わせることを求められる傾向性があることも否めない。

そこで、いわてレインボーネットワークでは、

東日本大震災で起こった性的マイノリティの人々の経験を、今後の災害対応の改善にいかそうと「にじいろ防災ガイド」を発行し、課題と改善の方向を示した。

性的マイノリティの立場から見た避難段階の課題については、①理解しあえる立場の者との連絡、②避難所受付での性別記載、③性別自認の通過させるか、プライバシーが守られるか、④生理用品や下着などの物資の受け取り、⑤男女別のトイレ、更衣室、入浴施設などの利用、⑥身体の性や戸籍の性で呼ばれること、⑦セクシャルマイノリティのことを理解し相談できる相手がいるか、⑧他者からの差別などが挙げられている（注2）。

身体上の姓や、男女2分法により、施設が配備され運営されていることに加えて、運営にかかわる人のみならず他の避難者の中に、性的2分法の先入観があることが、性的マイノリティの人々の困難を高めている。性自認や性的指向性において多様性が認められ、施設対応としても改善がなされていくことで、困難な経験は軽減されていくのである。

性的多様性にはいくつもの次元がある。自分らしく生きるプロジェクト（jibun-rashiku.jp）によれば、セクシュアリティには4つの次元があると指摘されている。A：身体的性 Sex、B：性自認 Gender Identity、C：性表現 Gender Expression、D：性的指向 Sexual Orientation の4次元である。

このうち、性自認において、アメリカおよび日本での先行調査では、マイノリティが約1割程度という結果が出ている。「働き方と暮らしの多様性と共生」研究チームが大阪市民を対象に実施した調査では、ゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダー、アセクシュアルの合計が3.3%で、これに「決めたくない、決めていない」を含めると、8.2%であるという（注3）。

3. 性別における「そのほか」

(1) 性別に関する質問

本調査では、性別「そのほか」を選択肢として用意したのは、性自認において、男女2分法では

回答できない人が選べる選択肢として用意したものである。性的マイノリティや性自認のことの説明を付して質問したものではない。回答者の意図をそれ以上に深く探ることはできない。しかしながら、中学生と高校生では、少数ではあるものの一定の回答を得ることができたので、この点を軸として分析を進めたい。

性的指向性・性自認におけるマイノリティは、少なくとも1割程度という近年の調査結果からすると、性別が本調査で、高校生において1.7%、無回答1.4%という数字は、微妙ではあるが、少なくとも、男女2分法には単純には当てはまらない生徒が、一定程度いて、その生徒たちが自認する性をいくらかでも表明するようになっていると考えられる。

本調査では、児童・生徒の基本属性について、①学校種類（小学校、中学校、高校、特別支援）、②学校場所（内陸か沿岸か）、③性別についてうかがっている。回答の結果をこうした基本属性との関係で比較考察することができるからである。

ここでは、性別に焦点を当てて考察する。性別に関する回答は、「1:男」「2:女」「3:そのほか」の3つの選択肢で聞いた。この属性にかんする質問は少なくとも現在は、男・女の2分法は妥当でないと考えられる。そこで、今回の岩手大学・岩手日報共同調査では、性別の選択肢を、上の3つにして質問したのである。

性別について、「男でも女でもない」「どちらでもない」「生まれた時に分類された性別と今自分自身の性の帰属とは異なる」との思いは、一定の割合で見られるのである。性の帰属に関する質問への回答は、男か女かに2分されるものではなく、性的アイデンティティや性的指向性が多様であることを示している。また、男女を2極化し、2分するのではなく、中間的な位置にアイデンティティをもつ人が決して少なくないことが最近注目されている。

こうした昨今の世界の情勢のなかで、本調査にもこうした傾向はうかがえるのであろうか。本調査結果では、「3:そのほか」を選んだ児童・生

徒が1%あった。回答者総数が約3000人なので、30人が「3」と回答したのである。

表1 児童・生徒の回答者数は3018名

性別	比率	人
男	46.7%	1408
女	51.3%	1548
そのほか	1.0%	30
無回答	1.1%	32
総計	100.0%	3018

(2) 調査項目と分析項目

児童生徒を対象とした本調査での質問項目は、表2に概略を示したとおりである。

表2 調査の質問項目

	分類	具体的な質問事項
A	震災からの教訓	家族から話を聞くこと、教員から話を聞くこと、地域で起こったこと等
B	新型コロナウイルス感染症の実践状況	感染症対策の実施状況、学校での指導、復興教育の学びとの関連
C	防災意識の実態	学校での防災等の話、自分の防災・災害の知識、校内での命を守る行動等
D	震災の教訓の伝承	近所の人や将来の子どもへの伝承意欲、伝えるための活動、行動等
E	防災、復興教育を学ぶ機会と効果	復興教育を学ぶ機会の頻度、活動内容・方法、防災意識の涵養等

(3) 性別「そのほか」と新聞

一般に、男女というカテゴリーで分けることが日常であって、そのように教えられているので、「3:そのほか」というアイデンティティを形成するのは難しい。回答する環境や、この結果を見る人の予測などによって、他の児童・生徒とは違った回答をすることには、かなりの自己抑制が働くと思われる。そうした中での1%なので、「3:そのほか」という回答がありうるということが、周りの児童・生徒、教師、家族らのなかで広く認識しされていれば、少なくとも2倍～10倍になってもおかしくないと思える。

これについてももう少し考察すると、全回答3018人のうち、性別の質問では無回答者が32人であった。この数は他の質問への回答よりも多いのである。属性に関する質問は、調査票の最後のほうで、そこまでたどり着かないという時間や判断の制約

が多少はあるのかとも想像することもできるが、一番最後の質問への回答における「無回答」17人よりも多い。この最後の質問は、新聞をどの程度読んでいるかという、ちょっと複雑な質問であることを考慮すると、性別への質問への無回答は、特に多いといえる。

表3 「新聞を読む」と「性別について」の無回答数

質問	回答数	無回答数	無回答の比率
「新聞を読む」	3001人	無回答17人	0.6%
「性別について」	2986人	無回答32人	1.1%

「1男」「2女」でもなく、そして「3そのほか」にも○をつけにくい心情が、回答者の一部にみられるというのも、この調査の結果として、受け留めていく必要があるのではないか。

表4 「新聞を読無」と「性別について」の無回答数

質問	回答数	3:そのほか*	比率
児童・生徒	3018人	30人	1.0%
教員	1222人	2人	0.2%

*性別「3:そのほか」と回答

ちなみに教員の場合は、回答総数1222人のうち、「3:そのほか」と回答したのは2人のみである。比率にして0.2%である。

調査の実施には、一定の統制効果が働く、つまり、自分が回答した結果を誰かが見られることを予見するのである。そのため、回答後に起こるかもしれないある種のリアクションを考慮して、回答する場合もある。成人は、自分自身が形成してきたパーソナリティの中で、性の2分法や、生まれた性のカテゴリーへのアイデンティティなどにより形成された固定性の影響がみられるかもしれない。性の2分法を受け入れて、特に違和感なく、1か2と回答した結果とも受け取れる。

こうした教員（成人）の回答結果とはもしかしたら状況を異にする児童・生徒のほうが、性の帰属の2分法に違和感をいだいていたりした場合に、そうした意識が、中学生や高校生の段階にお

いて、ある程度表出できているということであるかもしれない。

(4) 小、中、高と比率が上昇

成長・発達とともに、男女の2分法への帰属について、性のアイデンティティのゆらぎと新たな形成が入り混じっていると思われる。

「3:そのほか」への回答比率は、小学校で「0.0%」、中学校で「1.1%」、高校で「1.7%」と、徐々にあがっていく。ちなみに、特別支援学校では「0.0%」である。小学校は0%であることから、「3:そのほか」を選んだのは、中学校・高校の生徒である。以下では、性への帰属「そのほか」の生徒(中学生・高校生)の特徴についてみていく。

表5 学校種と性の帰属

学校種\性別	1:男	2:女	3:そのほか	無回答	総計
高校	42.2%	56.2%	1.7%	0.0%	1195
小学校	51.0%	49.0%	0.0%	0.0%	781
中学校	48.9%	50.1%	1.1%	0.0%	949
特別支援学校	68.9%	31.1%	0.0%	0.0%	61
総計	47.2%	51.8%	1.0%	0.0%	2986

4 防災関連の事項について差の特徴

(1) 自分の防災・災害に対する知識

「3:そのほか」の生徒について、防災関連の各項目との関連をみていくと、総じて、知識、意欲は他と同様の傾向がみられる。防災に関する知識、意欲について、いくぶん積極的な様子もみられる。

「自分の防災・災害に対する知識は十分だと思いますか どの程度そう思いますか」の問いに対して、表6に示したように、「1:とても思う」の比率は、男が12.4%、女が8.3%であるのに対して、「3:そのほか」では13.3%といくぶん高い比率となったが、他方で、「4:思わない」の比率では、男が7.4%、女が5.4%であるのに対して、「3:そのほか」の生徒は、23.3%と高い比率であった。「そのほか」の生徒が知識を身につける環境に、大きな差異があるのかもしれないということをおがわせるものであった。

表6 「自分の防災・災害に対する知識」について

性別\自分の防災・災害に対する知識は十分だと思いますか	1:とても思う	2:少し思う	3:あまり思わない	4:思わない	その他	総計
1:男	12.4%	44.5%	35.7%	7.4%	0.0%	1405
2:女	8.3%	42.7%	43.5%	5.4%	0.1%	1545
3:そのほか	13.3%	26.7%	36.7%	23.3%	0.0%	30
無回答	13.6%	40.9%	31.8%	13.6%	0.0%	22
総計	10.3%	43.3%	39.7%	6.6%	0.0%	3002

(2) 「津波てんでんこ」「命てんでんこ」

次に『津波てんでんこ』や『命てんでんこ』という言い伝えを聞いたことがありますか、また、その意味を知っていますか」との質問について、「1:言葉も意味もよく知っている」「2:知っているが意味は忘れてしまった」「3:知っているが意味は聞いたことがない」「4:聞いたことがない」の4択で聞いた。表7に示したように、「1:言葉も意味もよく知っている」の比率は、男で22.5%、女で27.2%、そして「3:そのほか」では、23.3%と、他とほぼ同様の結果であった。

表7 「自分の防災・災害に対する知識」について

性別\「津波てんでんこ」や「命てんでんこ」を知っていますか	1:言葉も意味もよく知っている	2:知っているが意味は忘れてしまった	3:知っているが意味は聞いたことがない	4:聞いたことがない	総計
1:男	22.5%	27.0%	13.0%	37.5%	1407
2:女	27.2%	31.7%	11.8%	29.3%	1548
3:そのほか	23.3%	23.3%	13.3%	40.0%	30
無回答	25.8%	32.3%	9.7%	32.3%	31
総計	25.0%	29.4%	12.4%	33.2%	3016

(3) 防災意識について：自分の住んでいる地域で起こりうる災害について

表8 「自分の住んでいる地域で起こりうる災害」について

性別\地域の災害イメージ	1:とても思う	2:少し思う	3:あまり思わない	4:思わない	総計
1:男	28.5%	44.4%	20.3%	6.8%	1407
2:女	21.9%	46.6%	27.2%	4.3%	1546
3:そのほか	30.0%	26.7%	26.7%	16.7%	30
無回答	13.6%	59.1%	22.7%	4.5%	22
総計	25.0%	45.5%	23.9%	5.6%	3005

調査では「防災意識」について、いくつかの質問をしている。各ことごとについて、どの程度そう思うか尋ねるものである。その中の1問「自分の住んでいる地域で起こりうる災害について、具体的なイメージができていますか、どの程度そう思いますか」について、「1:とても思う」「2:少し思う」「3:あまり思わない」「4:思わない」の4択できている。表8に示したように、自分の地域で起こりうる災害についてイメージができていますか「1:とても思う」の比率は、男では28.5%、女で21.9%、そして「3:そのほか」では、30.0%となっている。予測はできているという生徒の比率が低い。このように、予測ができていないかについて「4:思わない」と答えた比率も、16.7%と、男(6.8%)、女(4.3%)と比べて高い結果となっている。

(4) 東日本大震災で地域にどんなことが起きたか

「東日本大震災で、みなさんが住んでいる地域にどんなことが起きたか知っていますか」について、「1:詳しく知っている」「2:少し知っている」「3:あまり知らない」「4:ほとんど知らない」の4択できいた。表9に示したように、「1:詳しく知っている」では、男が23.1%、女が24.9%であるのに対して、「そのほか」の生徒は、27.6%といくぶん高い数値であった。また、「2:少し知っている」の比率においても、男や女より顕著に高かった。このことから、「そのほか」の生徒は、災害・防災に関する認知や知識において、高い傾向にあることがわかった。

表9 「東日本大震災で地域にどんなことが起きたか」について

性別\地域にどんなことが起きたか知っていますか	1:詳しく知っている	2:少し知っている	3:あまり知らない	4:ほとんど知らない	総計
1:男	23.1%	47.3%	18.8%	10.7%	1390
2:女	24.9%	48.6%	19.0%	7.5%	1539
3:そのほか	27.6%	58.6%	6.9%	6.9%	29
無回答	22.6%	64.5%	9.7%	3.2%	31
総計	24.1%	48.3%	18.7%	8.9%	2989

(5) 災害が起きたらどうするか、家族と話し合うこと

次に「地震などの災害が起きたらどうするか、家族と話し合うことはありますか」との問いについて、「1：普段からよく話し合っている（1カ月に1度以上）」「2：たまに話し合っている（1年に1度以上）」「3：あまり話し合っていない（数年に1度ぐらい）」「4：ほとんど話し合っていない」の4択で聞いた。表10に示したように、男、女、そして「3：そのほか」も、大きな差はないということである。

表10 「災害が起きたらどうするか、家族と話し合うこと」について

性別\災害が起きたらどうするか、家族と話し合う	1:普段からよく話し合っている(1カ月に1度以上)	2:たまに話し合っている(1年に1度以上)	3:あまり話し合っていない(数年に1度ぐらい)	4:ほとんど話し合っていない	総計
1:男	3.6%	32.8%	28.6%	35.0%	1401
2:女	3.9%	37.7%	29.8%	28.6%	1544
3:そのほか	3.3%	36.7%	23.3%	36.7%	30
無回答	3.1%	40.6%	31.3%	25.0%	32
総計	3.8%	35.4%	29.2%	31.7%	3007

5 自分自身の備え、避難について

(1) 災害が起きる可能性

表11 「自分たちの地域には、どんな災害が起きる可能性があるか確認している」について

性別\災害が起きる可能性があるか確認	ない	している	総計
1:男	58.5%	41.5%	1408
2:女	51.7%	48.3%	1548
3:そのほか	56.7%	43.3%	30
無回答	56.3%	43.8%	32
総計	55.0%	45.0%	3018

災害に対する自分自身の備えについて、男と女と「3：そのほか」の生徒とのあいだで差はなく同様とみられる。表11「自分たちの地域には、どんな災害が起きる可能性があるか確認している」に示したように、大きな差はみられない。

(2) 災害が起きたらどこに逃げるか

表12「『いまここで地震が起きたらどこに逃げるか』をいつも考えるようにしている」も、同様の傾向である。

表12 「『いまここで地震が起きたらどこに逃げるか』をいつも考えるようにしている」について

性別\どこに逃げるかをいつも考える	ない	している	総計
1:男	73.9%	26.1%	1408
2:女	73.9%	26.1%	1548
3:そのほか	76.7%	23.3%	30
無回答	65.6%	34.4%	32
総計	73.8%	26.2%	3018

(3) 非常時に持ち出すもの

表13「非常時に持ち出すもの（家族・個人どちらも）を準備している」も同様である。

表13 「非常時に持ち出すもの（家族・個人どちらも）を準備している」について

性別\持ち出すものを準備	ない	している	総計
1:男	68.8%	31.2%	1408
2:女	70.9%	29.1%	1548
3:そのほか	73.3%	26.7%	30
無回答	71.9%	28.1%	32
総計	69.9%	30.1%	3018

(4) マスク着用やせきエチケットを实践

表14 「【感染症対策】マスク着用やせきエチケットを实践について」

性別\マスク手指衛生	毎日欠かさず実践している	時々実践している	あまり実践していない	実践していない	総計
1:男	74.2%	21.3%	3.8%	0.7%	1407
2:女	84.2%	14.7%	1.0%	0.1%	1546
3:そのほか	73.3%	13.3%	10.0%	3.3%	30
無回答	75.0%	15.6%	9.4%	0.0%	32
総計	79.3%	17.7%	2.5%	0.4%	3015

さらに、表14【感染症対策】「マスク着用やせきエチケットを实践」においても、同様である。自分自身の関わることは、災害への備えの点でも、また予防実践の点でも、他の性別と大差がないことがわかった。

6 性の帰属と家族とのコミュニケーション

(1) 東日本大震災について家族から話をきくこと

自分にかかわること、そして自分自身の範囲のことにおいて、他の性と比べて大きな差がみられ

ない。しかしながら、「3：そのほか」の生徒の場合は、他者との関係、家族的関係、学校という集合体、共同的対処などのジャンルに入ってくると、他と差異がみられる。他者との関わりに、あるいは他者からの関わりや介入に関して、自己の範囲とは違った状況が生まれてくるからである。

「東日本大震災について、家族から話を聞くことはありますか」について、「1：普段からよく話し合っている（1カ月に1度以上）」「2：たまに話し合っている（1年に1度以上）」「3：あまり話し合っていない（数年に1度ぐらい）」「4：ほとんど話し合っていない」の4択で聞いた。表15に示したように、「1：普段からよく話し合っている（1カ月に1度以上）」では、男が5.0%、女が4.4%、「3：そのほか」が3.3%であった。また、「2：たまに話し合っている（1年に1度以上）」では、男が36.5%、女が44.8%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒は20.0%と、大きく下回った。このことから、災害に関して家族と話題にするような環境について、「そのほか」の生徒の場合は、顕著に低いことがわかる。

表15 「東日本大震災について、家族から話を聞くこと」について

性別\東日本大震災について、家族から話を聞くことはありますか。	普段からよく話し合っている(1カ月に1度以上)	たまに話し合っている(1年に1度以上)	あまり話し合っていない(数年に1度ぐらい)	ほとんど話し合っていない	その他	総計
1:男	5.0%	36.5%	29.1%	29.4%	0.2%	1407
2:女	4.4%	44.8%	30.2%	20.6%	0.1%	1546
3:そのほか	3.3%	20.0%	53.3%	23.3%	0.0%	30
無回答	3.1%	50.0%	21.9%	25.0%	0.0%	32
総計	4.6%	40.7%	29.8%	24.7%	0.0%	3015

(2) 家族で集合場所を決めること

こうした傾向は、他の類似した質問においてもうかがえる。表16に示したように、災害時の避難場所について「家族で集合場所を決めている」とした比率は、男で22.7%、女で27.8%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒の場合は3.3%に過ぎないのである。

表16 「家族で集合場所を決めている」について

性別\家族で集合場所を決めている	ない	決めている	総計
1:男	77.3%	22.7%	1408
2:女	72.2%	27.8%	1548
3:そのほか	96.7%	3.3%	30
無回答	78.1%	21.9%	32
総計	74.9%	25.1%	3018

(3) 学校で習ったことを家族に話す

また、「防災について学校で習ったことを家族にも話している」かとの質問においても、表17に示したように、「家族と相談している」比率は、男で32.3%、女で44.5%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒は13.3%に過ぎない。

以上の結果を総合すると、「3：そのほか」の生徒は、総じて、防災や災害に関する重要事項について、家族とのコミュニケーションが難しいという状況におかれている。こうした事態は、なんらかの方法により改善することが求められている。「3：そのほか」の生徒が抱える家族環境の問題の解明および何らかの対応が、防災教育の質を向上するためにも重要であるということが、本調査で分かったといえる。

表17 「防災について学校で習ったことを家族にも話している」について

性別\防災について学校で習ったことを家族にも話している	ない	家族にも話している	総計
1:男	67.7%	32.3%	1408
2:女	55.5%	44.5%	1548
3:そのほか	86.7%	13.3%	30
無回答	65.6%	34.4%	32
総計	61.6%	38.4%	3018

7 性帰属と学校での集団的な取り組み

(1) 学校の先生から話を聞くこと

「3：そのほか」の生徒をとりまく周囲の環境の影響は、学校内でもうかがえる。

「東日本大震災について、学校の先生から話を聞くことはありますか」について、「1：普段からよく話し合っている（1カ月に1度以上）」「2：たまに話し合っている（1年に1度以上）」「3：

あまり話し合っていない（数年に1度ぐらい）」「4：ほとんど話し合っていない」の4択で聞いた。すると、表18に示したように、「1：普段からよく話し合っている（1カ月に1度以上）」において、男は12.1%、女は10.7%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒は3.3%であった。また「2：たまに話し合っている（1年に1度以上）」においても、他と比べて低い傾向がみられた。

学校で先生から話を聞く機会は均等であっても、「3：そのほか」の生徒が実際的に、学べる、もしくは吸収できる、ないしは学習に価値を見出せるかどうかという、実質的な次元では、均等ではないのかもしれないのである。

表18 「東日本大震災について、学校の先生から話を聞くこと」について

性別\東日本大震災について、学校の先生から話を聞く	1:普段からよく話し合っている(1カ月に1度以上)	2:たまに話し合っている(1年に1度以上)	3:あまり話し合っていない(数年に1度ぐらい)	4:ほとんど話し合っていない	総計
1:男	12.1%	48.3%	20.3%	19.4%	1405
2:女	10.7%	53.9%	19.5%	15.9%	1545
3:そのほか	3.3%	43.3%	20.0%	33.3%	30
無回答	3.1%	56.3%	18.8%	21.9%	32
総計	11.2%	51.2%	19.9%	17.8%	3012

(2) 学校活動の中で、先生から防災・災害についての話を聞くこと

表19 「学校活動の中で、先生から防災・災害についての話を聞いていると思いますか どの程度そう思いますか」について

性別\学校活動の中で、先生から防災・災害についての話を聞いている	1:とても思う	2:少し思う	3:あまり思わない	4:思わない	その他	総計
1:男	39.1%	47.1%	10.4%	3.3%	0.1%	1407
2:女	34.6%	49.2%	13.9%	2.3%	0.0%	1548
3:そのほか	20.0%	30.0%	33.3%	16.7%	0.0%	30
無回答	18.2%	54.5%	27.3%	0.0%	0.0%	22
総計	36.4%	48.1%	12.5%	2.9%	0.0%	3007

上で述べた差違は、次の「学校活動の中で、先生から防災・災害についての話を聞いていると思いますか」の質問の結果からもうかがえる。「1：とても思う」「2：少し思う」「3：あまり思わな

い」「4：思わない」の選択肢に対して、表19に示したように、「1：とても思う」と答えた比率は、男が39.1%、女が34.6%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒の場合は、20.0%と、相対的に低いといえる。「2：少し思う」の比率においても、男が47.1%、女が49.2%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒の比率は30.0%と相対的にみてかなり低い。

授業で学習する環境において、なんらかの大きな差異が発生していると思えるのである。

(3) 災害や学校の安全について学ぶ機会

学校で災害や学校の安全について学ぶ機会においても、差異がみられる。「本年度、震災やさまざまな災害、学校の安全について学ぶ機会がありましたか」との質問について、「1：たくさんあった（1カ月に1度以上）」「2：少しあった（3カ月に1度以上）」「3：あまりなかった（6カ月に1度以上）」「4：なかった」の4択で聞いた。それによると、表20に示したように、「1：たくさんあった（1カ月に1度以上）」では、男が14.5%、女が10.2%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒の場合は6.7%であった。また、「2：少しあった（3カ月に1度以上）」への回答比率では、男が50.9%、女が52.9%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒は33.3%と低かった。「3：そのほか」の生徒の実感としては、学ぶ機会は、相対的に少ないと思われる。

表20 「本年度、震災やさまざまな災害、学校の安全について学ぶ機会がありましたか」について

性別\災害、学校の安全について学ぶ機会	1:たくさんあった(1カ月に1度以上)	2:少しあった(3カ月に1度以上)	3:あまりなかった(6カ月に1度以上)	4:なかった	1その他	総計
1:男	14.5%	50.9%	29.6%	5.0%	0%	1404
2:女	10.2%	52.9%	32.6%	4.3%	0%	1548
3:そのほか	6.7%	33.3%	36.7%	23.3%	0%	30
無回答	4.5%	59.1%	36.4%	0.0%	0%	22
総計	12.1%	51.8%	31.2%	4.8%	0%	3001

(3) 教科の授業

教科の授業における災害・防災教育の取り組みにおいても、性別による差は顕著である。「災害・防災に取り組む教科の授業」について聞いたところ、表21に示したように、「たくさんあった」「少しあった」と答えた割合は、男では40.0%、女では36.0%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒の比率は、23.3%に過ぎなかった。

表21 「教科の授業」について

性別\教科の授業	なし	「たくさんあった」 「少しあった」	総計
1:男	60.0%	40.0%	1408
2:女	64.0%	36.0%	1548
3:そのほか	76.7%	23.3%	30
無回答	78.1%	21.9%	32
総計	62.4%	37.6%	3018

(4) 「学校にいるとき、自分の命を守る行動を取ることができる自信がありますか」

学校における学習環境に差異があるということは、学校において自信をもった行動がとれるだろうかという疑問が湧く。そこで「学校にいるとき、自分の命を守る行動を取ることができる自信がありますか どの程度そう思いますか」という質問に対して、「1：とても思う」「2：少し思う」「3：あまり思わない」「4：思わない」の選択肢で聞いた。表22に示したように、「1：とても思う」と答えた比率は、男が31.7%、女が22.5%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒は16.7%であった。「2：少し思う」の比率は、男が48.0%、女が51.6%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒は40.0%であった。このように、「3：そのほか」が置かれている状況は容易なものではない。

しかしながら、差異は決して小さくないものの、「3：そのほか」の生徒の「1：とても思う」と「2：少し思う」の比率を合計した数値は、56.7(16.7+40.0)%である。改善の必要性がうかがわれるものの、学校は救いの安全な場であるというベースはあると考えられる。

表22 「学校にいるとき、自分の命を守る行動を取ることができる自信がありますか どの程度そう思いますか」について

性別\学校にいるとき、自分の命を守る行動を取ることができる自信がありますか	1:とても思う	2:少し思う	3:あまり思わない	4:思わない	その他	総計
1:男	31.7%	48.0%	15.8%	4.5%	0.1%	1395
2:女	22.5%	51.6%	23.1%	2.7%	0.0%	1536
3:そのほか	16.7%	40.0%	23.3%	20.0%	0.0%	30
無回答	18.2%	63.6%	18.2%	0.0%	0.0%	22
総計	26.7%	49.9%	19.6%	3.7%	0.0%	2983

(5) 災害などへ備える力や思いやりの心

かくして「本年度の学校活動の中で、災害などへ備える力や思いやりの心が身に付いたと思いますか」とうかがった質問においても、「3：そのほか」の生徒の数値が顕著に低いという結果となった。表23に示したように、「1：とても思う」「2：少し思う」「3：あまり思わない」「4：思わない」の選択肢で聞いた結果では、「1：とても思う」の比率が、男は23.9%、女が25.6%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒の場合、13.3%であった。「2：少し思う」においても、男が58.7%、女が59.5%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒は43.3%であった。

災害・防災教育を「思いやり」の教育と架橋することは、不可欠で重要なことであるが、現状では、課題が浮き彫りになっていると思われる。

表23 「災害などへ備える力や思いやりの心が身に付いたと思いますか」について

性別\学校活動の中で、災害などへ備える力や思いやりの心が身に付いた	1:とても思う	2:少し思う	3:あまり思わない	4:思わない	総計
1:男	23.9%	58.7%	14.3%	3.1%	1399
2:女	25.6%	59.5%	13.4%	1.6%	1542
3:そのほか	13.3%	43.3%	30.0%	13.3%	30
無回答	15.8%	63.2%	21.1%	0.0%	19
総計	24.6%	59.0%	14.0%	2.4%	2990

(6) 感染症対策に関する学校の指導

感染症対策における学校の指導について、「感染症対策について、学校ではどのくらい指導があ

りますか」と質問し、「1：頻繁にある」「2：時々ある」「3：あまりない」「4：受けたことがない」の4択で聞いた。表24に示したように、「1：頻繁にある」は、男が61.1%、女が62.7%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒の場合は43.3%であった。

感染症の指導の機会や効果という点でも差異がみられるのである。

表24 「感染症対策について、学校ではどのくらい指導がありますか」について

性別	1:頻繁にある	2:時々ある	3:あまりない	4:受けたことがない	総計
1:男	61.1%	32.5%	5.7%	0.6%	1401
2:女	62.7%	32.0%	5.1%	0.3%	1543
3:そのほか	43.3%	40.0%	13.3%	3.3%	30
無回答	68.8%	21.9%	6.3%	3.1%	32
総計	61.8%	32.2%	5.5%	0.5%	3006

8 地域社会での集会的な対処

(1) 学校の外にいるとき

次に、学校の外にいるときはどうかについて検討したい。「防災意識についての質問で、「学校の外にいるとき、自分の命を守る行動を取ることができる自信があると思いますか どの程度そう思いますか」について聞いた。

「1：とても思う」「2：少し思う」「3：あまり思わない」「4：思わない」の選択肢で聞いた結果では、表25に示したように、「1：とても思う」の比率が、男は31.4%、女が15.2%、「3：そのほか」の生徒の場合は13.3%であった。また「2：少し思う」においては、3者で差がみられなかった。男子・生徒においては、自信がみられるものの、他との差異がみられた。学校内と違った状況が地域社会にはみられるということである。

表25 「学校の外にいるとき、自分の命を守る行動を取ることができるか」について

性別	1:とても思う	2:少し思う	3:あまり思わない	4:思わない	総計
1:男	31.4%	44.2%	20.5%	3.9%	1406
2:女	15.2%	44.4%	35.1%	5.2%	1544
3:そのほか	13.3%	43.3%	26.7%	16.7%	30
無回答	13.6%	54.5%	31.8%	0.0%	22
総計	22.8%	44.4%	28.1%	4.7%	3002

(2) 避難所ができた時に自分がすべきこと

「避難所ができたときに、自分がすべきことを考えたり、訓練したりしている」かどうか聞いたところ、表26に示したように、「自分がすべきことを考えたり、訓練したりしている」とした児童・生徒は、全体として少なかった。地域防災の中に、児童や生徒が主体的に加わるような状況には至っていない様子が見えてくる。また、この点で、学校がどのようにかわるかは、容易な課題ではないかもしれない。

性別で見ると、「している」と答えた比率は、男で11.7%、女で12.5%、これに対して「3：そのほか」の生徒は3.3%であった。この点でも、「3：そのほか」の生徒は、地域社会にうまく包摂されていない様子が見えてくる。

表26 「避難所ができたときに、自分がすべきことを考えたり、訓練したりしている」について

性別	ない	している	総計
1:男	88.3%	11.7%	1408
2:女	87.5%	12.5%	1548
3:そのほか	96.7%	3.3%	30
無回答	84.4%	15.6%	32
総計	87.9%	12.1%	3018

(3) 地域への愛着

災害の発災時には、学校にいる時ばかりではなく、地域社会内にいることが多い。地域社会のことをよく知ることは重要である。そこで「あなたは、今住んでいる地域にはよいところがあると思

いますか」と聞いた。「1：とても思う」「2：少し思う」「3：あまり思わない」「4：思わない」の選択肢で聞いた。表27に示したように、「1：とても思う」の比率が、男は45.9%、女が43.5%、「3：そのほか」の生徒の場合は33.3%であった。「2：少し思う」においても、男が43.4%、女が45.0%であるのに対して、「3：そのほか」の生徒は26.7%であった。「3：そのほか」の生徒にとって、地域への愛着の現状はそう高くないことがうかがえる。こうした面での課題が浮き彫りになっている。

表27 「【よいところ】あなたは、今住んでいる地域にはよいところがあると思いますか」について

性別\地域にはよいところがあると思いますか	1:とても思う	2:少し思う	3:あまり思わない	4:思わない	その他	総計
1:男	45.9%	43.4%	7.9%	2.8%	0.1%	1399
2:女	43.5%	45.0%	10.0%	1.4%	0.1%	1541
3:そのほか	33.3%	26.7%	16.7%	23.3%	0.0%	30
無回答	25.0%	55.0%	15.0%	5.0%	0.0%	20
総計	44.4%	44.1%	9.1%	2.3%	0.0%	2990

(4) 居住継続意向

居住継続意向について「あなたは、今住んでいる地域に住み続けたいと思いますか」との問いに「1：住み続けたい」「2：住み続けたくない」「3：どちらでもない」の3択で聞いたところ、顕著な差異がみられた。表28に示したように、「1：住み続けたい」の比率では、男が43.6%、女が38.5%であるのに対して、「3：そのほか」は13.3%と、極端に低い数値となった。家庭や地域社会における疎外感がこうした回答結果から推察される。こうした点に、学校が取り組むことの困難さも想像できる。社会全般の問題が内包されていると、筆者らには思われる。

表28 「【居住継続】あなたは、今住んでいる地域に住み続けたいと思いますか」について

性別\今住んでいる地域に住み続けたいと思いますか	1:住み続けたい	2:住み続けたくない	3:どちらでもない	総計
1:男	43.6%	17.2%	39.1%	1393
2:女	38.5%	17.8%	43.7%	1537
3:そのほか	13.3%	23.3%	63.3%	30
無回答	15.8%	15.8%	68.4%	19
総計	40.5%	17.6%	41.9%	2979

9 性別の見直し、さらなる展望

(1) 性帰属と伝承意向

児童・生徒は、近い将来、社会の担い手として、地域の安全や防災を担う存在である。そこで、性帰属と「伝承意向」との関係を検討する。「あなたは、震災の教訓や震災後の歩みについて、近所の人や将来のあなたの子どもらへ伝えたいと思いますか」との問いに、「1：とても思う」「2：少し思う」「3：あまり思わない」「4：思わない」の選択肢で聞いた。表29に示したように、「1：とても思う」の比率が、男は36.1%、女が45.0%、「3：そのほか」の生徒の場合は20.0%であった。また「2：少し思う」においては、3者に大きな差はなかった。

「1：とても思う」への回答の比率が、「3：そのほか」の生徒において低い傾向がみられたが、こうした性帰属の生徒も含めて、伝承意向が高まる方策が今後問われるであろう。

表29 「【伝承】あなたは、震災の教訓や震災後の歩みについて、近所の人や将来のあなたの子どもらへ伝えたいと思いますか」について

性別\近所の人や将来のあなたの子どもらへ伝えたい	とても思う	少し思う	あまり思わない	思わない	総計
1:男	36.1%	45.3%	14.1%	4.6%	1405
2:女	45.0%	45.3%	8.7%	1.0%	1537
3:そのほか	20.0%	40.0%	23.3%	16.7%	30
無回答	40.9%	45.5%	13.6%	0.0%	22
総計	40.5%	45.2%	11.4%	2.8%	2994

10 結果の考察

以上の結果、性別「そのほか」は、家、学校、

地域でも、マイノリティの立場にあり、意識はあっても、集団的取り組みに馴染めていない、困難な状況にあるのかもしれない。集合的な避難行動や避難所の生活は、相当程度の集団主義によって行われる空間・機会でもある。そこで、こうした段階でのとりくみの工夫や改善が求められる。

多様な児童・生徒をインクルージョンして、多様性をみとめ、少数派の個性や能力が発揮できるような環境整備、教育実践・改革などが求められるのではないだろうか。

性別「そのほか」については、多様な性が含まれていると推察される。LGBTQ について、①どちらか決められないという生徒にくわえて、②男女2分法になじまないという生徒も含まれているのではないか。また、男女2分法やジェンダーヒエラルキーの影響を受ける今の社会や学校社会の文化の中で、所与の優位性に対する違和感を抱き、自分が下位であるかのような位置づけに生きづらく感じている生徒も含まれているのではないか。

この質問においても、男、女、そのほか、のように、男女2分法を前提とし、他を残余のように位置づけているようなことにも違和感を感じている生徒もいると思われる。男女2分法ではない選択肢があるということが普通に普及していれば、「そのほか」を積極的に選ぶ生徒はもっと多くなるのではないか。

そうすると、そもそも男女を前提とするような、基本属性の質問そのものが不要という考えもあろう。しかし、人々の多様性を相互に理解するためには、この2分法から入り、すべての児童・生徒、社会の構成員にとって、性の多様性を相互理解することの重要性にたどりつくことが重要であると思われる。

災害時に発生する、過度の（避けがたいとされる）集団主義を改善していく必要があるのではないだろうか。男女に2分にされ、過密状態におかれる避難所をどうするか。トイレ、風呂・シャワーの施設整備や使用方法について、居室、寝室についても同様である。

限られた空間や施設整備状況の中では、多様な人々相互の理解の不足から、ジェンダーヒエラルキーが顕在化し、あるいは、避難所ヒエラルキーが生まれる。おなじマイノリティでも、元気のよい男性高齢者は相対的にまだ強いという傾向もみられる。

個々のニーズの訴えは、私的な主張とか、わがままと解され、いやなら出ていくしかないという圧力にさらされるということが予測される。

また過度の集合主義的な状況が発生する避難行動や、避難所生活には参加したくないという人々もあらわれ、いっそのこと、避難するのをやめようという選択肢の人々が層を成すことも考えられる。集合主義的な避難学習や、避難訓練、避難所運営訓練は、気が重い、いやだという反応である。また、集団主義に適応できないとラベリングをされがちだから、家庭や学校でのコミュニケーションは苦手、あまり乗り気がしないという人々もいると思われる。筆者が調査した東日本大震災における避難行動の中にも同種の傾向がうかがわれたからである。

こうした社会の構造、文化的な前提の流れを可能な限り改善し、性に関して（他の点からも）多様性を相互に理解し、受け入れ、支え合える教育を実践的に導入できる場面は、学校からではないだろうか。

①<自助>として、多様な人々が、それぞれに自助できるように、②<共助>として、多様な人々が、相互に理解し合い、助け合えるように、③<公助>として、多様な人々の安全が損なわれないような社会基盤（インフラ、備え）、住環境、人権に配慮しそれへの侵害を防ぐシステム、社会文化を構築することが、重要であるように思われるのである。

注

（注1）児童養護施設がLGBTの子を拒否「個室ない」「ほかの子に影響」（2018年10月14日付東京新聞朝刊）

（注2）いわてレインボーネットワーク「にじい

る防災ガイド」(2016) 参照。

(注3) 「LGBTの割合は日本で10人に1人? 左利きの人と同じ割合? 2020年の最新調査ではどれくらい?」(自分らしく生きるプロジェクト、jibun-rashiku.jp)

参考文献

- 浅野幸子・池田恵子, 2019, 「ジェンダー視点から見た災害過程の各段階における指標の検討」『科研費基盤 (A) 19H00613 2019年度報告書 ジェンダー WG (指標グループ) 1』
- 浅野幸子, 2020, 「大阪北部地震における地域コミュニティの災害対応の実際—地域内外の連携官営にも着目して」『関東都市学会年報』(21): 23-35.
- 浅野幸子, 2021, 「国内におけるジェンダー視点の防災政策の到達点と課題」『公共政策志林』(9): 54-72.
- 池田恵子・浅野幸子, 2016, 「市区町村における男女共同参画・多様性配慮の視点による防災施策の実践状況—地域コミュニティの防災体制に定着するための課題」『地域安全学会論文集』(29): 165-174.
- いわてレインボーネットワーク「にじいろ防災ガイド」(2016)
- 高松洋子・麦倉哲・梶原昌五, 2016, 「東日本大震災被災状況からみた社会の脆弱性とその克服課題—被災から復興における性差」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』(15): 23-35.
- 内閣府男女共同参画局, 2020, 「男女共同参画の視点からの防災・復興の取組指針」.
- 東日本大震災女性支援ネットワーク, 2012, 『災害支援にジェンダーの視点を! こんな支援が欲しかった!—現場に学ぶ、女性と多様なニーズに配慮した災害支援事例集』.
- 東日本大震災女性支援ネットワーク, 2013, 『男女共同参画の視点で実践する災害対策災害とジェンダー基礎編』.
- 麦倉哲・飯坂正弘・梶原昌五・飯塚薫, 2013, 「東日本大震災被災地域にみられた救援・助け合いの文化—岩手県大槌町避難所運営リーダーへのインタビュー調査から」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』(12): 15-28.
- 麦倉哲, 2013, 「東日本大震災の被災から復興における『脆弱性』と『社会階層』—暮らしの面と心の平穏に焦点を当てて」『理論と方法』28 (2): 269-288.
- 麦倉哲・野坂真・浅川達人, 2020, 『2019年度岩手県大槌町災害復興公営住宅入居者調査調査結果報告書』岩手大学教育学部社会学研究室 専修大学人間科学部社会学科野坂ゼミ 明治学院大学社会学部浅川研究室.
- 麦倉哲・野坂真, 2021, 「東日本大震災被災者の住の変遷—岩手県大槌町被災者調査から」『日本都市学会年報』(54): 221-230.
- 麦倉哲, 2021, 「大災害時の避難所対応はどうあるべきか子連れ・女性避難者の経験から再考すること」『災害復興研究』Vol.13: 33-48
- 山下梓, 2019, 「防災に性的マイノリティの人たちの視点を」『近代消防』(708): 84-87.